



(福山明るいまちづくり協議会提供)

人の想いをつなぐローズマインド 協働で「ばらのまちづくり」を推進

「100万本のばらのまち福山」——このキャッチフレーズは、決して誇張ではない。2010年に策定された「ばらのアクションプラン」に基づき市民・事業者と行政が一体となって取り組みを進め、市制施行100周年の2016年に100万本の目標を達成した。ばらのまちづくりの歴史は60年以上の長きにわたり、市民は「ばら」を戦災からの復興の象徴、平和のシンボルとして愛し、慈しんできた。ばらの普及とともに市が力を注ぐのは、ローズマインドと呼ばれる「思いやり、優しさ、助け合いの心」を、市民の中に育むことだ。その実践は子どもときから始まっている。2025年には、「ばらのまち」をさらに次のステージへ押し上げる機会として、「第20回世界バラ会議福山大会2025」が開催される。

広島県
福山市



福山の名を冠したばらが多数 市が独自に開発した品種も

鉄道で福山を訪れた人は、駅から一步出た瞬間にここが「ばらのまち」であることを実感するだろう。南口に広がる駅前広場は、約45種・約1,000本のばらで覆われている。ここから、約280種・約5,500本が植栽されているばら公園まで、徒歩30分ほど。そのルートはローズロードと呼ばれ、歩道の植え込みなど至るところでばらを目にすることができる。ばら公園からさらに少し歩けば、威容を誇るピラミッド型花壇に約330種・5,100本が植えられている緑町公園に行きつく。



市制施行100周年記念ばら
(ローズマインドふくやま)

もちろん、市の花はばら。福山の名を冠したばらも多く、「ローズふくやま」は市制施行70周年、「ローズマインドふくやま」は市制施行100周年を記念して誕生した。「スマイルふくやま」のように、市が独自に開発した品種もある。

2015年に制定された「福山市ばらのまち条例」の基本理念の中にも謳われているが、福山におけるばらのまちづくりの歴史は、当初から市民・事業者・行政の密接な連携・協働によって進められてきた。

市民のばらへの思いと 市長の都市整備構想が合致

1945年8月8日——広島に原爆が落とされてから

わずか2日後。福山は大空襲に見舞われ、市街地の8割が焼失、355人の尊い命が失われた。終戦を迎え、一面の焼け野原から復興への道のりがスタートしたものの、人々の心の痛手はなかなか癒えなかった。そんなとき、市民に勇気や希望をもたらしたのが、優雅に咲き誇るばらの花だった。

華やかな姿と高貴な香りをもつ“花の女王”ばらは、戦後の復興とともに人々の間で人気が高まり、家庭での栽培も一般化していった。福山でも1949年、実業家の中村金二さんが、横浜で開催された博覧会を訪れた際に出会ったばらの美しさに魅了され、ピースというばらの苗を福山に持ち帰った。その品種が第2次世界大戦の終結を記念して命名されたという、「平和」の名を戴くものであった時点で、物語の始まりは約束されていたのかもしれない。

中村さんのばら園をきっかけに、ばら愛好家の輪が広がっていき、「市内をばらでいっぱいにして荒廃したまちに潤いを蘇らせ、人々の心に優しさや思いやりを取り戻そう」という機運が盛り上がっていった。その思いは、当時の徳永豊市長の「特色ある都市公園を整備する」という構想と合致。市が予算化し植樹は市民有志の手で行うという役割分担によって、1956年から57年にかけて約1,000本のばらが当時の南公園に植えられた。これが現在のばら公園である。

1956年から、市民団体「福山ばら会」が春と秋に「バラ展示会」を現在のばら公園で開催するようになった。翌57年に秋の催しが福山市主催の「福山バラ展」となり、その後、62年からは春と秋の主催団体が逆になり、秋は現在に至るまで福山ばら会主催でばら展が開かれている。

春については、68年に広島日独協会と市の共催で



(左) 福山駅前広場 (福山明るいまちづくり協議会提供)
(中) 緑町公園ローズヒル
(右) ばら公園

行うことになり、これを機会に「ばら祭」と称するようになった。71年には、JCや市が中心となって福山祭委員会が設立され、市民と行政の協働による運営体制が確立した。92



年にメイン会場が緑町公園となってからは、商店街も巻き込むなどいっそう大規模な催しになっている。77年に25万人だった来場者も、2019年には86万人と飛躍的に増えた。

ばらが福山市の花として正式に定められたのが85年。92年には、福山市がばらを市町村の花としている自治体などに呼びかけ、第1回ばら制定都市会議（ばらサミット）を開催。93年にはばらのシンボルマークが制定された。2007年策定の第四次総合計画では、将来都市像が「にぎわいしあわせあふれる躍動福山～ばらのまち福山～」とされた。

ばらのアクションプランに基づき「100万本のばらのまち」を実現

ばらのまちづくりが着々と進められていく中、さらに加速させ飛躍させることになるのが、2010年に策定された「ばらのアクションプラン」だ。

アクションプランは、①福山の知名度・都市ブランド向上、②シンボルとなる拠点の充実拡大、③市民のばらに対する想いの共有、という3点を指すもので、具体的な目標としては市制施行100周年の2016年度に「100万本のばらのまち」を達成することを掲げた。08年時点での市内の植栽本数は55万本と推計され、ほぼ倍増させる計画だ。目標の実現に向けて、次の4つのプロジェクトが進められた。

①新たな名所、拠点となる場所の創出プロジェクト…拠点ばら花壇の整備、福山駅周辺や国・県道など主要道路への植栽、ローズロードの整備、公共施設への植栽など。拠点ばら花壇については、ば

- (左上) ばらを植える住民
- (右上) 深津小学校スマイルガーデン
- (右中) ばら大学
(挿し木講座)
- (右下) ばら大学
(せん定講座)



ら公園や春日池公園の充実のほか、市内の各公園でのばら花壇の新設やリニューアルを行った。公共施設については、市内の全公立幼稚園と小中学校のほか、支所や公民館などにばら花壇を設置した。

②全市を挙げてみんなで取り組むプロジェクト…市民へのばら苗配布、出生祝い、入学記念、新築記念などでのばら苗配布、住民による地域ばら花壇整備への補助、国・県道沿いの花壇・プランターを市民や事業者が世話するアダプト制度の導入など。

③ばらの植栽サポートプロジェクト…せん定や接ぎ木の講習会、地域でばら花壇を整備する際に専門家が外向く出前講座、ばら栽培のリーダー育成を目的とする「福山ばら大学」など。福山ばら大学は10年度から毎年開講されており、月1回、全12回の講座によりばらの知識と技術を習得する。

④花だけじゃない!!ばらのアピールプロジェクト…PR活動、イメージキャラクター「ローラ」の活用、ローズマインドの醸成など。

ばらのまちづくりの推進にあたっては、主に市民局がソフト面、建設局がハード面を担っているが、新たに「100万本のばらのまちづくり庁内連携会議」を設置。全庁一丸となって目標の実現に向かっていった結果、計画通り16年に100万本を達成し、応援大使の加藤登紀子さんらを迎えて記念音楽祭を開催した。

全公立小にばら花壇を設置するなど 子どもの頃からローズマインドを醸成

福山市ばらのまち条例でも強調されている「ローズマインド」の語は、1996年にJCばらのまち福山推進協議会の活動テーマとして使われたのが最初という。JCではばらのまち福山の理念を広く伝えるキーワードとして継続的に使用するようになり、公式にも定着していった。一般的には「思いやり、優しさ、助け合いの心」と説明されるが、福山市世界バラ会議推進室ばらのまちづくり推進担当次長の市川宏治さんは「平和、レジリエンス、愛情、シビックプライドなど、さまざまな思いが込められている」と話す。

ばらのまちづくりを推進すること自体がローズマインドを育むことであると言えるが、特に子どもたちへそうした思いを伝えようと、小学校の総合学習の時

間にまちづくりの歴史やばら栽培について学ぶ時間を設けている。また前述のとおり、市内の全公立小学校にばら花壇を設置している。

なかでも注目されるのは、19年度に小中一貫校として開校した市立鞆の浦学園だ。7・8年生の生徒たちが、ばらの歴史やまちづくりについて学びながら、ミニばらを挿し木から育てることに挑戦。育てたばらは新1年生にプレゼントしている。またコロナ禍の20年度は、「ローズマインドプロジェクト」として、いつも支えてくれる人や応援したい人に向けた感謝やエールの想いを手紙や音楽に乗せて届けた。

03年のばら祭で始まった「折りばらプロジェクト」

も、ローズマインドの具現化と言えるだろう。数学者・川崎敏和さんが考案して世界的に有名となった折りば



折りばら

ら「カワサキローズ」をアレンジしたもので、同年8月6日・8日には、市民の手による折りばら5万個が、広島平和記念公園内「貞子の像」と福山市戦災死没者慰霊の像「母子三人像」に献納された。2001年にアメリカで同時多発テロが発生した際には、犠牲者慰霊の思いを込めた911個の折りばらがニューヨークに届けられた。

福山明るいまちづくり協議会が ばら花壇コンクールを主催

市民と行政の協働がより具体的な形となったのは、1965年に設立された「美しくする委員会」が最初だ。自治会など地域団体と市によって構成され、花いっぱい運動を展開してばらのまち福山の礎を築いた。

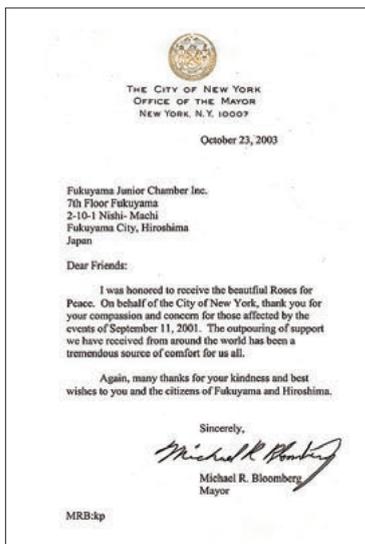
73年には、他の団体との統合によって「明るい町づくり-福山市民運動推進協議会」として再発足。93年に「福山明るいまちづくり協議会」と改称して、現在に至っている。個人・団体・企業が会員になっており、6つの専門部会で活動している。そのうち、ばら愛好団体や自治会などをメンバーとするばら委員会は、栽培技術に精通した市民を「ばら普及員」として委嘱する制度を運用。普及員は現在30人おり、福山ばら大学や各種講習会の講師として活躍している。

69年から開催されているばら花壇コンクールも、同協議会が主催だ。対象となるのは、市内に花壇を有し50本以上のばらを植栽している団体。地域花壇の部、企業花壇の部、学校・公民館花壇の部の3部門で審査がなされ、合わせて毎年80~100件ほどの応募がある。各部門の最優秀賞は、モデルばら花壇として認定される。

市内にはさまざまなばら愛好団体があり、独自に活動するとともに同協議会ばら委員会の構成団体と



学校ばら花壇整備事業



NY市長からの手紙

もなっている。なかでも、前述した秋のばら展示会を主催している福山ばら会は56年設立、最初に1,000本のばらを植栽したときにも関わった。ばら公園内にある「ばらハウス」の運営、ばら栽培相談・講習会なども行っている。「福山ローザリアンクラブ」は05年に設立され、花園公園内にあるばら花壇の管理のほか、栽培相談や講習会などの活動をしている。00年設立の「ばらオーナー会」は、「ばらオーナー制度」を運用している。緑町公園に植栽されているばらのオーナーを募集（1本2,000円）。オーナーとなった個人や団体はネームプレートが設置され、春と秋には切りばらがもらえる。

「ばらグッズフレンズふくやま」「一般社団法人ローズシティ福山」「特定非営利活動法人福山みどりの会」なども、ばらのまち福山の情報発信や市民啓発に取り組んでいる。

2025年5月に40か国が集い 第20回世界バラ会議福山大会2025を開催

2025年には、第20回世界バラ会議の福山での開催が決まっている。同会議は、世界40か国が加盟する世界バラ連合が3年に一度開催する国際会議。各国からばらの研究者や生産者、愛好家、芸術家など約700人が集い、情報交換や討議、交流などを行う。なかでも「栄誉の殿堂入りのバラ」の審査・決定は、世界中のロザリアンにとって大きな関心事となっている。

福山市が同会議を誘致したのは、「100万本のばらのまち」という目標を達成し、ばらのまちづくりを次のステージへ押し上げる契機にしたいという思いから。「ばらを産業やビジネスの振興にもつなげていきたいし、地方創生や福山のブランディングという視点からもばらの新しい可能性を広げられたら」と、市世界バラ会議推進室の高橋成規さん。同室世界バラ会議推進担当次長の岡本次郎さんも、「これまでばらグッズ認定などの取り組みはあったが、会議を起爆剤として本格的なばら産業を育てていきたい」と語る。ローズマインドによる協働・共創の取り組みを広げることを通じて、SDGs（持続可能な開発目標）の実現にもつなげる考えた。

実施計画によれば、会議は25年5月に開催。同月

18～24日の本会議をはさんで、プレツアーとポストツアーも予定されている。テーマは「Roses for the Future～福山からはじまる、新しい未来～」、コンセプトは「みんなで創る みんなで盛り上げる みんなで輝く」。実行委員会には、特別顧問として観光庁、農林水産省、外務省、経済産業省、広島県知事などが名を連ねる。また実行委員会のもとに設置される専門委員会は、JCや福山ばら会などこれまでばらのまちづくりの主体となってきた各種市民団体等で構成される。

これまで同様にこの世界会議も、多様な立場の市民が主体的に参画し、一体感を高めながら作りあげていく催しになるはずだ。生活が「個」に分断されがちなコロナ禍の今こそ、その意味はさらに高まるに違いない。市世界バラ会議推進室長の平林由佳さんは、「戦争で荒廃したまちから立ち直って100万本のばらのまちを実現した福山なので、きっとこの会議も成功に導けると信じる」と力強く語ってくれた。



100万本のばらのまち達成



左から世界バラ会議推進室の市川宏治さん（ばらのまちづくり推進担当次長）、平林由佳さん（室長）、岡本次郎さん（世界バラ会議推進担当次長）、高橋成規さん